

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第422回

首都医校の活動報告



務台 文夫
(首都医校 教務責任者)

清華大学大学院生が

日本のリハビリ・介護学ぶ

医療・福祉の資格と就職を保証する専門学校首都医校では、世界大学ランキングでアジアトップの清華大学(中国)の学生との国際研修プログラムを実施しました。プログラムには、清華大学社会科学大学院の学生7名が参加し、各自の研究テーマに関連する「日本のリハビリ・介護」について学びました。中国では、日本と同様に超高齢化社会をむかえ、多様化・複雑化している福祉ニーズに対してどう取り組むのか、制度だけではなくその中で活躍する人材育成が近々の課題となつていきます。本プログラムでは、日中の若者が高齢者・障害者支援の過程と取り組みを共有し、従来の「助けるだけの介護」から「顕在化している能力」「潜在する能力」を尊重した自立に向けた生活支援技術の理解を深めることを目的としました。

清華大学の学生たちは、建築、医療、農業など異なる専攻ですが、日本の医療分野に対する関心から、本プログラムに参加。本学では歯科衛生士、作業療法士、介護福祉士のカリキュラム体験と両国学生による意見交換会が組まれました。

初日は、「高齢者の食生活を支えるチームケア」に関する講義が行われ、日本の高齢者を取り巻く実態や専門職と他職種との連携について説明されました。その後、歯科衛生士、作業療法学科、介護福祉学科の教員による講義と実習が続き、また、

歯科衛生士学科では、高齢者の口腔状況や口腔と全身の健康の関連性について学びました。実習では、高齢者の食事指導や、マネキンと器具を用いた口腔ケアの体験が行われました。作業療法学科では、自助具の種類や患者の事例について説明があり、実際に自助具を作成する場面では、首都医校の学生がジェスチャ

プログラムスケジュール	
1日目	到着 科学技術振興機構(JST)表敬訪問
2日目	オリエンテーション 講義『高齢者の食生活、自助具の活用』(作業療法学科) 東京ビックサイトを訪問して「大学見本市」見学
3日目	講義『8020の支援と口腔ケアの実践』(歯科衛生士学科) 意見交換会
4日目	アゼリーグループ 社会福祉法人 江寿会 見学 日本科学未来館 見学
5日目	筑波CYBERDYNE STUDIO 介護支援用 ロボットHAL 見学
6日目	講義『高齢者の口腔ケア』(介護福祉学科) 帰国

も交えながら丁寧なサポートしました。介護福祉学科では、高齢者の生活に寄り添った口腔ケアを、レクリエーションを通じて体験しました。

清華大学の学生たちは、研修中にさまざまな鋭い質問をしました。「自助具は患者の症状に合わせて作るのか、既製品はどう使い分けているのか」「チーム医療にはトップ(指揮者)がいるのか」といった質問が挙がり、参加者全員にとって有意義な議論が展開されました。また、両国学生による意見交換会では、清華大学の学生が医療・福祉の専門職を目指した理由や実習経験について熱心に質問し、お互いの国の医療実態や文化についても意見が交わされました。この交流は和やかで、学びの多い時間となりました。

研修を通じて、首都医校の学生からは「言語の壁はあるものの、ジェスチャーや物を使って理解してもらえたことが嬉しかったです。清華大学の学生とのディスカッションでは、新しい視点を得ることができました」、また、「中国には作業療法士という職業はまだ存在しないため、自分の学びを知ってもらえる機会になりました。日本語でのコミュニケーションが難しい中で、どう伝えるかを工夫する必要があります」と感じました」という意見もありました。

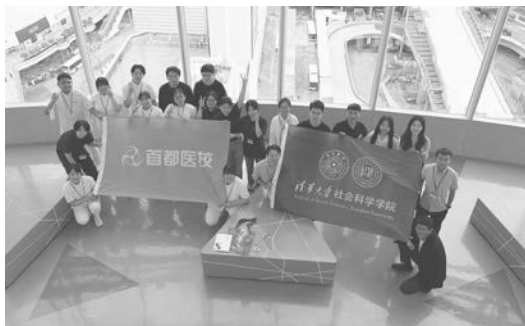
日本で活躍している中国出身の卒業生も、介護現場の現状を紹介するため本研修に参加しました。「清華大学の学生たちの質問が非



両国学生による意見交換会



介護福祉学科の講義と演習・実技



清華大学と首都医校の学生による集合写真



歯科衛生学科による演習・実技

意見がありました。首都医校には前記学科以外にも看護学科をはじめ23学科あり、他学科とのチーム医療の授業を豊富に取り入れています。今後は教員同士の交流も深め、学生間の交流の機会を活発にし、日中間で抱える多様な課題・ニーズに対応できる人材育成の実現につなげたいと考えています。

本プログラムでは介護福祉士、歯科衛生士、作業療法士が「食生活」にフォーカスした講義・演習を実施し、各職種の理解と重要性の認識を促しました。今回実施した多職種連携や、予防の視点、介護福祉士の担う役割は、日中両国が抱える、高齢者人口の増加とそれを支える人の減少」という課題解決の鍵になると考えます。本事業に参加した首都医校の学生からも「自分たちの職種について伝える側になることで、職種の強みと連携の重要性を再認識した」という

◎ 今後の展望

そのいくつかをご紹介します。
 ・学内での交流は大変勉強になったが、今度は学外に出て介護施設を見学し、実践を試みたい。
 ・さくらサイエンスプログラムでは具体的なことを学べたので、今後は日本の介護や福祉関連の制度や、それを実施できている社会構造の枠も体系的に学びたい。
 ・両校の学生の成長を図るため、介護における重要な資料や教材があったらお互い共有していきたい。

◎ 後日談

プログラム終了後も清華大学と本学の学生は頻りに連絡を取り合い、交流を継続しています。また2024年10月末には本法人の責任者がプログラム参加者に中国で再会し、あらためて日本での研修成果や、将来の希望などをヒアリングする機会がありました。彼らは社会課題に対する危機意識が非常に高く、「高齢社会学」について今後も日本から学ぶべきものが多くあると話してくれたそうです。

常に鋭く、専門家のような視点であり感心しました。歯科衛生学科の講義で学んだことは、今後の仕事に活かしていきたいと思います。中国では介護保険制度が進んでいないため、日本の制度を参考にし、中国でも制度が確立できるよう貢献したいです」との声がありました。

一方、清華大学の学生たちは、「首都医校の学生の気配りに感動しました。言葉の壁があっても、私の困っていることを察してサポートしてくれました。今回の研修はスタートに過ぎないので、次回は清華大学に来ていただき、さらに交流を深めていければと思います」と述べ、また「日本の高齢者社会の理念に大変感銘を受け、中国の超高齢化社会に活かしていきたい」との意欲を示しました。